

学会通信

第12号

会員の皆さまへ

理事長 米山文明

麗和の候、会員の皆様にはご清栄にご活躍のこととお慶び申し上げます。

学会通信も創刊以来12号となりました。いつまでつづけられるか不安もありましたが、会員と編集委員の皆様のお陰でここまでこられましたことを厚く御礼申し上げます。学会誌に載せるには不適切なもの、緊急にお伝えしたいこと、会員の皆様からの各種情報がほしかったこと等々、時間的、予算的に余裕がないのにかなり欲ばって創めました。この間を振り返ると若干良かったこともあります。反省点も多々あります。今後もつづけるためにはどんな点を反省し、何を改善していくべきかを少し考えてみました。学会誌35号の巻頭言と重複しないものについて、思いつくままに述べます。

待望久しかったホームページも池田京子理事のご苦勞で開かれましたので、事務的な連絡事項やニュース伝達、情報公開など、かなりスピードアップされ、便利になったと思いますが、実際どこまで活用されているのかが気になります。折角の宝の持ち腐れにならないよう、皆様に十分活用していただきたいと思います。それによって情報量もかなり増えますし、会員相互の情報交換やディスカッションも活発化すると思います。演奏面においても、最近是全国的に演奏会場が増え、演奏回数もかなり多くなり、そのためかえって何時、どこで、何があるのか、

的がしぼりにくくなった感があります。研究面、教育面いずれをとっても、いろいろな団体が似たようなことをバラバラにやっている部分もあります。この新兵器を使って、ほかの団体と連携し、学会の各分野の発展に大きく貢献できれば、などと願っています。

40年史も関係各位のご努力で無事発刊までこぎつけました。深く感謝し、今後の学会活動の参考資料として役立ててほしいと思います。

年2回の例会も時々地方で開催してはどうか、という意見もありましたが、地方の準備態勢が予算、会場その他の都合で時期尚早の感があり、実現できませんでした。この点につきましては、地方会員の増強が必要になりますが、逆に地方開催により、その地区の会員が増える効果もあります。

「発声教育」の面もかなりの収穫がありました。これからのよいよ具体的な実践活動の時期に入る段階です。

学会主催のコンサートも、そのありかた等について検討を重ねたいと思います。

学会誌(35号)にも若干触れましたが、かねてから懸案の「用語集」編纂も積み残しです。その他やるべきテーマは山積していますので、今後新鮮な執行部のエネルギーを結集して、学会のために輝かしい実績と成果をあげてほしいと期待します。それには何としても会員の皆様の大きなバックアップが不可欠です。どうぞ今後も新しい執行部にご指導、ご鞭撻をお願いいたします。

これまで頂きましたご好意とご協力に重ねて深く感謝いたしますとともに、会員の皆様のご健康とますますのご活躍を祈念いたします。

【Q&A】

〈声楽家も知っていてほしい解剖用語〉その2
〔体の動きを表現する用語〕

- ・**外転(abduction)**：上肢または下肢が体の正中線から離れる方向に動くこと。
- ・**内転(adduction)**：再び元の位置に戻る、または正中線方向に戻る動き。

- ・屈曲(flexion)：体幹または四肢が前方に動くこと。
 - ・伸展(extension)：後方に動くこと。
 - ・回内(pronation)：手掌が後方に向く方向に前腕が回転する運動。
 - ・回外(supination)：手掌が前方に向く方向の運動。
 - ・内がえし(inverted)：足底が内側に向くとき。
 - ・外がえし(everted)：足底が外側に向くとき。
- [関節の動きを示す用語]
- ・回旋(rotation)

(1)内旋(medially rotaed)：身体の正中線に向かって起こる場合。

(2)外旋(laterally rotaed)：正中線から離れる場合。

- ・側屈(lateral flexion)：回旋していない背部が直立位を保っているとき、頭や体幹が左右どちらかの側に曲がる運動をいう。

[余談] 体の動きを示すことば〈外転〉abduction について。小林武夫会員によると、昨今マスコミをにぎわす〈拉致〉ということばも英語で abduction というそうです。そのため声帯を外転させる筋肉の外転筋 abductor muscle を自動翻訳機で引いてみたら〈誘拐筋〉と訳していた辞書があったそうです。(F.Y.)



[海外研修会]

- テノール、バリトン、バスのための研修会
2007年6月11~16日
インディアナ大学ジェイコブス音楽学部
本学会理事、小川昌文氏・池田京子氏、
会員の黒田彰氏・虫明眞砂子氏などが学
ばれた米国インディアナ州ブルーミング
トンで、男性歌手のみを対象とした珍し
い研修会が開かれる。
講師 ポール・キースゲン、ロバート・ハ
リソン、アンドレアス・ポウリメノ

ス、リチャード・ミラー

受講料 \$ 525 聴講 (15人限定) \$ 200

締切 5月14日

参照 <http://www.music.indiana.edu/special-programs/voice/>

[海外だより]

パリ便り その2

アンネ・ゾフィー・フォン・オッターの
コンサート、ラングのリサイタル

佐野友紀

パリ市の東北に国により開発された音楽空間の地域がある。ここには大小のホールのほか、会議室、ミュージアム、楽器博物館、ガムラン研究所、現代音楽レジデンス等の施設がある。ここでは1シーズンに6つのテーマを設け、その一つとして評価の高い演奏家、作曲家、指揮者等が、それぞれ1週間に亘る「ドメイス・ブリヴェー(私有地)」と呼ぶコンサートを開く。

その一つとして、アンネ・ゾフィー・フォン・オッターが1月に4夜に亘るコンサートを開いた。

第1夜は「ミュージック・フォア・ア・フォワイル」と題し、16、17世紀イタリアバロックとイギリスバロックを取り上げ、フレスコバルディ、モンテヴェルディ等とダウランド、パーセルとランベールを楽器博物館所蔵のクラヴサン、リュートに合わせて歌った。モンテヴェルディの「アリアンナのラメント」におけるレチタティーヴォの激しいイタリア語、それにつづくメロディの感情の表出、後半イギリス エリザベス朝期のパーセルの「テムペスト」に付けた歌、特にダウランドの歌曲集から可憐な心揺する小曲を低めの椅子に座り、下半身の安定の上に上半身をゆるやかに使い、時に踵を踏みならすなど、リュートに寄り添うように巧みな英語で歌い、自らも楽しむかのようによりイタリアとイギリスのバロックの対照を浮き彫りにした。

第3夜はフォーレの「優しき唄」を中心とした

プログラムで、この曲集を弦楽五重奏（作曲者編）とともに歌った。ヴェルレーヌの魂の告白ともいうべき9曲からなる恋歌、少女への燃え立ち揺らぐ心、2曲目から次第に高まるリリシズム、3曲目のやわらかな夜、呼び起される密やかな想い、4曲目の不安とおののき、6曲目の切ない高まりから終曲へ向かって晴れやかな愛の歓喜へと開かれていく地中海的な澄明で色彩感ある歌唱で、この象徴的ともいえる歌曲集を表現した。

フォーレを歌うとき、ややもするとその詩と音の巧緻な綾にからまれ、閉ざされた世界しか表現できないことが得てしてあるのだが、オッターは随所を細やかな表現で包み込み、「優しい唄」を広々とした世界へ羽ばたくようにときはなち、聴衆の心の中に明るく広いフォーレの世界を招き入れた。

第4夜は「ポップとフォーク」、8名のジャズマンのバンドに彼女の伴奏者フォルスベルクのピアノを加え、故国スウェーデン民謡、60年代フォークソング、クルト・ヴァイルのキャバレソングやシャンソン等をジーンズを穿き、高い椅子に腰掛け、マイクを片手に時には身体を揺すり、クルト・ヴァイルのキャバレソングではチェスト・ヴォイスを使って過激なドイツ語で表現し、シャンソンになれば軽やかなリズムに乗って幅広い中音で、そのメランコリーを、曲想により鮮やかに変容する歌唱、しかも少しも低俗に陥らない音楽的表現に、歌と人が一体になった感があった。

母語のほかに、イタリア、イギリス、ドイツ、フランスの5ヶ国語を自在に歌いこなし、その意味を明確に伝える見事さ、私の聴いた3夜は、それぞれに異なる歌の世界であったが、それらを歌い分け、音楽の根源は一つ、それぞれに固有の表現にある、ということ強く知らしめてくれた。こうしたコンサートを開くことは誰にでもできるわけではない。才能と高いインテリジェンスを合わせ持つ人にもみ可能であり、オ

ッターは、まぎれもなくその1人であることを証したコンサートであった。

また、3月にはルーヴル美術館地下のオーディトリウムでペトラ・ラングのリサイタルがあった。昨年（2005年）10月より今春へかけて、市立劇場で上演されたワグナー「指輪」4部作に関連し、このオーディトリウムを中心にパイロイトでの往年の名歌手たちの歌う映画、講演会などがあり、その一環として開かれた。パリでラングのリサイタルは初めてのことで、期待する向きも多かった。

プログラムはブラームスの歌曲、ヴェーゼンドンクの歌、シベリウスの歌曲とリヒアルト・シュトラウスであった。

数年前、私は彼女の歌うストラヴィンスキー「オイディプス王」のイヨカステを聴き、実力ある人という記憶があり当夜に臨んだ。声は深いメゾプラノ、ブラームスの色濃いロマンを滑らかな中声を中心に高音も低音もよくひびき、特に「永遠の愛」は深い感情をよく表現していた。しかし、ヴェーゼンドンクになると、その音楽の深みある大きな流れにたじろいだのか、声は伸びず、言葉は明確さを失い、表現も平坦になってしまった。シュトラウスのときも明快で大胆ともいえる音の流れに乗れず、レガートで歌うことができない。

イヨカステを聴いたときは別人の印象であった。太り肉となってステージ姿も変わり、そのマナーも少女染みて、クンドリー、ブランゲーネ等をヨーロッパの歌劇場で歌っている人のキャリアを感じられず、総体的に違和感があった。

さらに、歌手と伴奏者という点からも考えさせられた。ピアニスト、ヴォルフラム・リーガーは、ウエルバとドイッチュに師事、シュワルツコップやフィッシャー・ディスカウのマスタークラスのピアニストとプログラムには記されている。

伴奏ピアニストといえば、ジェラルド・ムーアをはじめ、近年にはダルトン・ゴールドウィン、グラハム・ジョンソン等名手がいるが、音楽を識りぬいた上で歌手とともに一つの世界を創っている。しかし、私にはこのピアニストは、自分の

理解した音楽を披露したにすぎないと思われた。「モルゲン」の朗唱風な終わりをラングは感情移入して歌ったが、リーガーはつづく短い後奏を型通りに弾くと間髪を入れず立ち上がった。聴衆は呆気にとられた。そこには歌い手は不在であった。早春の風の冷たいパリの宵であった。
*この稿は昨年号の執筆で、11号掲載分の後半です。

第5回 ハイブリット・シュッツ合唱団東京
ドイツ演奏旅行報告
淡野弓子

2006年12月17日(日)午前11時ドレスデン聖母教会礼拝奉仕、シュッツのモテット2曲、ラインベルガーのモテットを歌う。会衆は世界各地からおよそ1800名。同日午後5時、プロース教会にてコンサート。シュッツに加えてディストラの「クリスマス物語」。18日(月)ライブツィッヒのメンデルスゾーンの通っていた改革派教会で、彼のモテット、シュッツとディストラを歌う。20日(水)ハイルブロン・シュッツ合唱団とともにバッハの「クリスマス・オラトリオ」全6部を演奏。いまだに真摯で誠意にあふれたドイツ市民に囲まれ、シュッツ、バッハ、メンデルスゾーンからディストラに至る音楽の低層流に触れえた貴重な体験でした。

◎第6回教育部会開催のご案内

- 1、とき 平成19年5月26日(土)
10:30~16:00
- 2、ところ 芸能花伝舎(西新宿)
- 3、プログラム
 - A 10:30~12:00 音声生理学講座(その6)
講師 米山文明(米山耳鼻咽喉科院長・
本学会理事)
 - B 13:00~14:40
(1)児童・生徒にどのように発声を指導して

いくべきか

—基本的指導用語の用い方を踏まえて—
研究発表 池田京子・小川昌文(各理事)
現場の先生の実際指導例を発表

(2)14:40~15:00 質疑応答

C 15:10~16:00

グループ別ディスカッションとまとめ

- 4、会費 2,000円(5月21日までに郵便振替にて。
口座 00170-0-119920 日本声楽発声学会)
- 5、申込方法 郵便振替用紙の通信欄に「教育部会参加費」と明記してください(必ず事前申込のこと)。

[会員だより]

◆演奏会◆

◇ テノールの饗宴

2007年6月3日(日) 14:00 開演

第一生命ホール

出演 早瀬一洋・宮下正(会員) 秋山衛
近安昭一

曲目(予定) アマリッリ 愛の喜びは

「トスカ」より「星は光りぬ」

カタリー マンマ トスティ歌曲

鐘が鳴ります 出船 初恋 他

入場料 4,000円

お問合せ 044-434-4771(早瀬)

[事務局より]

◎平成19年第86回例会(11月)の研究発表を募集いたします。締切は5月末日です。学会誌36号、学会通信への投稿もお待ちしております。演奏会、出版、CD制作等近況についても、どうぞ事務局までお寄せください。また、ホームページに関するご意見、ご要望も「広報委員会」あてによろしくどうぞ。 事務局長 川上勝功

学会通信 第12号	平成19年3月28日
日本声楽発声学会事務局	
〒275-0005 習志野市新栄2-9-2 西村暁子方	
TEL/FAX. 047-479-5701	